

# 情動調整に視点を当てることによる教師の子ども理解の変容

—特別支援学校高等部における SCERTS モデルを活用した実践から—

○岩附敦史

(静岡県立富士特別支援学校)

KEY WORDS: SCERTS モデル 情動調整 能動的な参加

## I. 目的

自閉症児は情動調整が困難であることが指摘されている。情動調整は、あらゆる活動において能動的に学んでいくための基盤となるものである。そのため、学校現場においてもその支援を検証していくことは重要な意義がある。SCERTS モデル (Prizant, 2010) では、自閉症児 (ASD 児) の社会コミュニケーションと情動調整に焦点を当てると同時に、交流型支援として関わる人や環境にも焦点を当てた包括的教育アプローチが提唱されている。

本研究は、SCERTS モデルを活用して対象生徒の情動調整を目指した支援を行った。その過程において、対象生徒の学校生活での取り組みの様子と教師の生徒に対する行動の見方や理解が変容したことについて考察する。

## II. 実践

**①対象生徒**：特別支援学校 (知的障害) に在籍する高等部3年の ASD 児 (17 歳男) 1 名。SCERTS モデルのコミュニケーション段階は、会話パートナー段階である。実態としては、手先が器用で、指示されたことは素直に応じて取り組むことができる。しかし、学校生活において、大きな声で好きなキャラクターの名前やセリフを言うなどのエコラリアが頻発し、それが原因で産業現場等の実習において、望ましい評価に繋がらないということがあった。

**②担任、保護者の理解**：大きな声＝問題行動と捉え、その背景には普段と違うイレギュラーな学校行事や環境の変化等による漠然とした不安感が要因であると考えていた。そしてこれまでに、問題行動を消去しようといくつかの支援を試みたが、期待するような効果は得られなかった。

**③方法**：本実践は、クラス担任 2 名と保護者、そして教職大学院生 1 名の支援チームで行った。高等部 2 年 1 月～高等部 3 年 2 月の期間で SCERTS モデルのアセスメントである SAP-0 (観察) を 3 回実施した。その結果と本人の困り感や将来の願い、保護者のニーズを支援チームで共有し、情動調整の目標と手立てとしての交流型支援を決定し、実践を行った。また、教師の変容については、教職大学院生が担任と保護者にアンケートを実施し、その結果を支援チームで共有した。尚、調査対象者本人・保護者には研究の内容について説明し、同意を得ている。

## ④実践経過

**高等部 3 年 1 学期**：大きな声が出ており、頭を叩くなどの自傷行為も見られた。この頃から SCERTS モデルの活用を通して、これまで問題行動と捉えていた大きな声は、本生徒にとっての情動調整の行動方略の 1 つであると捉えるようになった。

**2 学期**：情動調整の目標を 2 つ設定し、支援を行った。

**(1) 情動調整の行動方略の活用**：目標として、休憩時間に情動を調整できるように、休み時間の過ごし方の支援を行った。まずは、教師からの提案に応じる相互調整を促し、自ら休憩時間の過ごし方を選択、実行する自己調整に繋がっていきたく考えた。そのための交流型支援として、「選択肢を提示する。」「本人の選択を尊重する。」等を行った。その結果、教師から提案された「別室で過ごす。」を、自ら意思表示し、実行するようになった。また、情動が調整さ

れている時には、「本を読む」、「音楽を聴く」等の意思表示をしたり、笑顔で友人と関わったりする姿も見られた。

**(2) 情動調整のメタ認知方略の活用**：調整不全の要因として考えられる漠然とした不安感に対する目標として、「イレギュラーな活動において提示されたストーリー等を頼りに、落ち着いて活動に取り組む。」を設定した。これは、SCERTS モデルにおける「新しい状況や変化のある状況でメタ認知方略を使用する。」から選定した。交流型支援として、「スケジュールの提示」、「イレギュラーな活動において、本生徒を主語としたストーリーを提示」、「活動後のフィードバックにもストーリーを活用」を行った。その結果、ストーリーは提示されると、一通り目を通していった。時々内容について、教師に 2 語文程度で会話をしてくることがあった。校外学習や宿泊学習は、本生徒にとって不安度が高く、以前は頻繁に大きな声が出たり、何度も教師に確認を求めたりという行動があった。しかしストーリーの提示後は、それらの行動がほとんどなく、落ち着いて過ごすことができ、これまで以上に能動的に活動に参加できていた。

## III. 結果

本実践では、SCERTS モデルの活用を通して教職大学院生が担任と保護者に、実践を通しての意識変化のアンケートを行った。その結果、「大きな声＝問題行動と捉え、それをなくすことに意識が向いていた。大きな声をなくすのではなく、安定した情動状態になるための支援を考えるようになった。」「私たちが視点を定めることで、生徒の気持ちの状態に大きな差が生まれると分かった。」「社会参加ということに親がプレッシャーを感じ、自分の思いで息子を転がそうとしていた。親である私の気持ちと行動を変えること、そして息子は息子のままでいいんだ。息子の良いところを探して認めようと思うようになった。」(T1、T2、保護者のアンケート結果の一部抜粋) という内容であった。つまり、教師と保護者の対象生徒に対する見方や理解が変容したことが示された。それにより、目標設定と支援内容が変わり、対象生徒の学校生活への取り組みも能動的な参加へと変容していった。

## IV. 考察

SCERTS モデルの活用により、教師、保護者が自分の教育観や支援の在り方を見直すきっかけとなった。それは、「支援者が望ましいと考える行動へと子どもをコントロールしていた。」という気付きであった。そして、これまで問題行動と捉えていた行動を情動調整の視点で捉え、「他の調整方略の獲得を目標に据える。」「調整不全の原因を予期し、適切な支援を与える。」等、子ども主体の目標、支援へと改善されたことが、本生徒の情動調整へと繋がる大きな要因になったのではないかと考える。今後も、学校と家庭、子どもが相互に変容することで情動調整が育まれるという視点に立った実践を積み重ね、より良い支援の在り方についての検討が必要である。

(文献) Prizant 他. (2010). SCERTS モデル—自閉症スペクトラム障害の子どもたちのための包括的教育アプローチ. 1 巻アセスメント (長崎勤・吉田仰希・仲野真史 訳). 日本文化科学社 (IWATSUKI Atsushi)